



**Data**

監督・脚本: ルカ・ミニエーロ  
出演: マッシモ・ボボリツィオ/フ  
ランク・マターノ/ステファ  
ニア・ロッカ

## 👁️👁️ みどころ

歴史上の「If・・・」はいろいろある。私の最大のそれは「もし、イエス・キリストが帰ってくれば・・・」だが・・・。

『帰ってきたヒトラー』を原作とした同名のドイツ映画は面白かったが、何とヒトラーをムッソリーニに変えて脚本を書き、イタリア国民に警鐘を鳴らしたのはルカ・ミニエーロ監督。さて、その問題意識は那边に・・・？

ストーリー構成はヒトラー版と同じだが、国民の親しみの点ではムッソリーニの方がヒトラーより上・・・？愛嬌の点からはそうも考えられるが、赦せるか否かを問われるTV番組における、老イタリア夫人の究極の選択は？『愛の勝利を ムッソリーニを愛した女』(11年)と一緒に観賞するのも一興だが・・・。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□着想は『帰ってきたヒトラー』。本作の問いかけは？■□

私は2016年6月18日に『帰ってきたヒトラー』(15年)を観たが、同作はメチャ面白い。え、鋭い風刺を含む貴重な問題提起作だった。同作を観たのが、折しも2016年7月10日に投票される参議院選挙の直前だったため、私はその評論で、「梶添知事を選んだ東京都民も猛省せよ！」と書いた(『シネマ38』155頁)。それから3年後の今の日本国は少しはマシになっているの？

『帰ってきたムッソリーニ』と題された本作の着想は、ドイツで200万部以上を売り上げたベストセラー小説『帰ってきたヒトラー』(ティムール・ヴェルメシュ著/原題『ER IST WIEDER DA』)にあるが、舞台をドイツから今のイタリアに置き換えた上で、ムッソリーニが現代のイタリアで再び権力を握ったらどうなるのか？それが、本作の脚本を書き、

監督をしたルカ・ミニエーロの問いかけだ。

もし、ムッソリーニが今あの軍服姿で突然現れたら・・・？もちろん、そんなバカなことが起こるはずはないが、映画は何でもありだから、そんなストーリーの設定も可能だ。しかして、本作導入部では、1945年4月28日に死亡したはずのムッソリーニが、2017年の同じ日に、空から地上に落ちてくるシークエンスが登場するが、その場所は？そして、その姿は？

## ■□■本作はそっくりさんや影武者ではなく、正真正銘の本物■□■

『キングダム』(19年)は、若き日の秦の始皇帝のそっくりさんを影武者に仕立てていく物語だった(『シネマ43』274頁)し、張芸謀(チャン・イーモウ)監督の『SHADOUW 影武者』(18年)は懸命に鍛え上げられた影武者が沛国の国の宰相として、既に立派な活躍をしているところからストーリーが始まっていた(『シネマ45』265頁)。また、黒澤明監督の『影武者』(80年)は、今や「そっくりさん」や「影武者」をテーマにした映画のバイブルになっている。しかして、本作冒頭、突如空から降って沸いたように登場した第2次世界大戦当時の軍服のままの男(マッシモ・ポポリツィオ)はムッソリーニのそっくりさん？

売れない映像作家アンドレア・カナレッティ(フランク・マターノ)が、そんなムッソリーニを偶然カメラに収めたところから始まったドキュメンタリー映画の製作旅行は傾調に進んでいるようだ。2人でイタリア全土を旅しながらの撮影旅行では、ムッソリーニをそっくりさんだと思った若者が屈託なくスマホを向けると彼は戸惑いながらも撮影に応じ、また市民の中に飛び込んで、不満はないか？と質問を投げかけると移民問題や政府に期待していない生の声があふれ出していた。そして、その様子が動画サイトに投稿されると、再生回数がどんどん増え、ネットで大きく拡散されていくことになったから、カナレッティは万々歳だ。

しかし、実は本作冒頭に登場するムッソリーニはそっくりさんや影武者ではなく、正真正銘のホンモノ。そして、死後72年も経た2017年の4月28日に“復活”してきた当のムッソリーニも、当初は現代のイタリアの姿に大いに戸惑っていたが、「この国は何も変わっていない」と確信した彼は、再び絶大な国民からの人気を集めることによって、再びこの国を征服しようという野望を抱くように。しかして、それはどんなやり方で・・・？

## ■□■視聴率至上のTV局では、このネタ(キャラ)は最高！■□■

『帰ってきたヒトラー』では、タイムスリップで現代に蘇ったヒトラーが、「モノマネ芸人」として大ブレイクすると、TV局の3人の責任者たちがヒトラーのそっくりさんの活用方法を巡ってくり広げる権力闘争が面白おかしく描かれていた。それと同じように、本作でもカナレッティの動画が拡散していくと、TV局の新編集局長カティア・ベッリーニ

(ステファニア・ロッカ) とその配下になった副編集局長ダニエーレ・レオナルディ (ジョエレ・ディクス) の間で、「ムッソリーニ・ショー」でのムッソリーニの活用方法を巡って激しい権力闘争がくり広げられるので、それに注目!

新編集局長に抜擢されたカティアは、「ムッソリーニ・ショー」の最初の放映での高視聴率に大満足だが、彼女やTV局の製作スタッフたちはムッソリーニが現代に蘇り、再びこの国を征服しようという野望についてどう考えているの?私が見る限り、彼らはそんな問題には全然興味を持たず、ただ視聴率にのみ関心が向いているようだが、それってかなりヤバイのでは?

他方、カナレッティとのイタリア全土の撮影旅行中、ムッソリーニがある婦人の連れたかわいい愛犬を射殺し、それが動画で発信されたため大問題が!ムッソリーニはなぜそんな酷いことをするのか?そんな声が全イタリアで巻き起こった上、婦人からは損害賠償の請求も。さあ、ムッソリーニやカナレッティ、そしてTV局はそれにどう対応するのか?

## ■□■ファシズムとは?ネオ・ファシズムとは?■□■

ファシズムって何?ファシズムとナチズムとの異同は?また、ネオ・ファシズムとは?あらためてそう問われると、その答えは難しい。戦前の日本は明治憲法下の議院内閣制の民主主義国だったにもかかわらず、軍部の発言力が強まり軍備が拡張される中で軍国主義が強化された。しかし、そこでは日本特有の天皇制との関連が強かった。したがって、あくまで民主主義体制の下、国会での多数を握ることを目指したイタリアのファシズムやドイツのナチズムとは大きく異なっていた。また、三国同盟を結び、枢軸国として米英仏露などの連合国と第2次世界大戦を戦った日独伊は、戦後の軍国主義、ナチズム、ファシズムとの決別についても、相違点が多い。そして、近時のイタリアではネオ・ファシズムが盛り上がっているし、ムッソリーニの孫であるアレッサンドラ・ムッソリーニも1993年11月のナポリ市長選挙では敗れたものの、ナポリ選挙区選出の下院議員として大活躍している。

パンフレットによれば、それらの点についてのルカ・ミニエーロ監督の認識は次のとおりだ。すなわち、

①『帰ってきたムッソリーニ』はムッソリーニやファシズムを語る映画ではない。私はファシズムを絶対の「悪」だと思っているのでそれを描くつもりはなかった。これは今日のイタリアを描いた映画だ。

②原作小説を映画の脚本に書き換えるにあたり、何よりも重視したのは決してムッソリーニを裁いたり、改めて彼がしたことを審理したりしないということだ。裁きはすでに歴史が下している。我々は設定を変えたり、何かを教えたり、危険なことを知らせたりせず、今日のイタリア人がどう反応するのかを見たかった。そして、そうすることで多くのことを発見した。

③ムッソリーニは異星人ではなく、我々イタリアのモラルを反映した存在とも言える。ムッソリーニの復活は、根源的な恐怖の復活であり、彼を受け入れることによって我々の権力構造の悪意も明らかになる。今も当時もそれは変わらない。この作品が暗に提示する問いはシンプルだ。「ムッソリーニが現代のイタリアで再び権力を握ったらどうなるのか？」だが、答えは単純でない。

本作を觀賞するについては、ムッソリーニのそっくりさんを見て笑い飛ばすだけでなく、ファシズムとは？ネオ・ファシズムとは？それについて改めて考える必要がある。

## ■□■本作 vs 『愛の勝利を ムッソリーニを愛した女』 ■□■

本作ではムッソリーニの29歳年下の愛人クラレッタ・ペタッチの名前が何度も登場するが、ムッソリーニの華やかな女性関係については全く触れられていない。11月15日に公開される『LORO 欲望のイタリア』(18年)では、スキヤンダルにまみれたイタリアの元首相ベルルスコーニの政治とカネ、失言の他、さまざまな女性問題が赤裸々に暴露されるらしい。陽気で女好きなイタリア男は、古代ローマ帝国のシーザーを含め、聖物のドイツ人や真面目な日本人と違って女関係は華やかだが、さてムッソリーニのそれは？

ムッソリーニをタイトルに入れた映画には、『ムッソリーニとお茶を』(00年)や、『愛の勝利を ムッソリーニを愛した女』(11年)がある。後者は、関係を持った女性は数百人をくだらないと言われているムッソリーニと、若き日のムッソリーニのカリスマ性に惚れてムッソリーニが日刊紙「ポポロ」を発刊するのを支援した女性イーダとの関係を描いた興味深い映画だった(『シネマ26』79頁)。2人の間に子供が生まれてから、ムッソリーニにはれっきとした妻と子がいることを知らされたイーダの怒りは相当なものだったが、その後、彼女はどんな行動をとったの？『愛の勝利』というタイトルがふさわしいかどうかは別として、同作にみるイーダのその後の行動は非常に興味深くシリアスな映画だった。

しかし、それに比べると、本作は軽妙さが売りだし、「そこまで言って委員会」と同じようにギリギリの演出が生命線になっている。もっとも、日本人の多くはムッソリーニの「実績」については、ヒトラーのそれほど詳しく知らないから、その分『帰ってきたヒトラー』とはハンディキャップがあるが、それでも本作は私には結構面白い。そんな視点で考えると、本作 vs 『愛の勝利を ムッソリーニを愛した女』は？この両者を見比べてみるのも一興だ。

2019(令和元)年10月17日記